

会津若松商工会議所
会員数 2,678事業所
[平成30年12月3日現在]
詳しくは会津若松商工会議所の
ホームページをご覧ください。
会津若松商工会議所 検索



会津若松商工会議所

AIZUWAKAMATSU CHAMBER OF COMMERCE AND INDUSTRY

会津の地で「日本の観光の未来」を考える

全国商工会議所観光振興大会2018 in会津若松

観光の力を地域活性化に活かすための方策を学ぶ「全国商工会議所観光振興大会2018 in会津若松」が11月5日から3日間にわたり、会津若松市を会場に開催しました。当所と日本商工会議所が主催、福島県商工会議所連合会の共催。「観光地から感動地へ」のテーマのもと約1300人が参加し、これからの我が国の観光の在り方について最新の取組を学びました。全体会議や分科会、エクスカーション(視察研修)で理解を深めただけでなく、交流会で会津の食を堪能していただくなど地域のPRにも大きな効果がありました。大会の様子について紙面にて報告いたします。



全体会議は初日の11月5日、會津風雅堂で開催しました。全国191商工会議所から約1300人が参加、当所議員による実行委員会委員や女性会メンバーがお出迎えして、参加者を歓迎しました。一貫中剣舞部20名もステージで剣舞を披露してオープニングを飾りました。

▲全国からの参加者へ感謝と歓迎の挨拶を述べる洪川会頭

「観光地から感動地へ」は旅行者の気持ちをとらえ、心に訴える形で地域の魅力を提示しようという掛け声であり、リピーターを増やそうと期待を込めて、日商観光委員会(足利会頭)が報告。各地の観光振興への取組をたたえる「全国商工会議所」の表彰式も行われました。続いて「琵琶湖疏水通船復活事業」で大賞を受賞した京都・大津商工会議所が事例発表しました。

▲一貫中による白虎隊剣舞

基調講演要旨

インバウンドが年々増加している中、我が国は二〇二〇年に四千万人、二〇三〇年に六千万人のインバウンド数値目標を掲げています。国家ブランド力をもと、日本の総合ブランド一位、観光ブランド二位、観光競争力指数は世界四位とされています。現実の外国人訪問者数は世界十二位、アジアでも四位にとどまっています。ブランド力と訪日客数のアンバランスがみられますが、これは訪日客を更に増やすポテンシャルがあると捉えることができます。



「外国人目線」と「連携」がカギ

日本政府観光局理事長 清野 智氏

インバウンドを地域に呼び込んでいくためには「外国人目線」と「連携」がポイントになってくると思います。「外国人目線」は、ターゲットの特性を見極めた効果的なプロモーションや受入れ環境の整備、具体的にはWiFi(ワイファイ)整備、多言語対応、キャッシュレス対応が挙げられます。体験型コンテンツの拡充も必要です。物見遊山は物見遊山だけでは、行政と民間の連携、地域と関連産業の連携を取り組んでいくことが重要です。各地域が戦略をもって誘致に取り組むことで、地方の魅力的な観光資源を世界に発信できることになるでしょう。

「感動地とは何か？」観光の未来について意見を交わす

東洋大学大学院 丁野客員教授がコーディネート



▲感動地の実現に向け意見交換する(左から)丁野氏、矢ヶ崎氏、山田氏

パネルディスカッションは「観光地から感動地へ」の全体テーマを受け、「都市部と地方観光地の共存が描く日本の未来」を主題に意見交換しました。

丁野東洋大学大学院国際観光学部客員教授がコーディネーターを務め、矢ヶ崎紀子同大学国際観光学部教授、スイスを拠点に地域の観光振興に取り組む山田桂一郎J.T.I.C.S.W.I.S代表がパネリストとして出演しました。

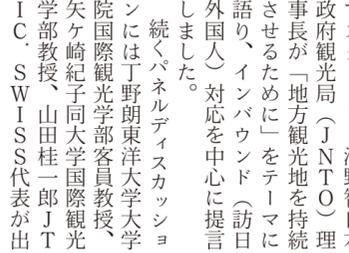
山田氏は「地域の暮らし」について指摘し、「その地域に暮らす人々が古里の良さを再認識し誇りを持つことで観光客にも感動が伝わる」と語りました。

- ①地域には、それぞれ歴史や生活文化、自然環境等に根ざした有形・無形の地域特性がある。訪れる人々はその日常を感じ、体験し、学ぼうとしている。地域が一体となり、単なる観光地ではなく、人々の心を揺さぶる「感動地」へと歩を進めよう。
- ②観光客の地域分散が進むよう、国には、地域の点と点をつなぐ「線」、さらには「面」へと広がる交通網の整備と体系づくりを強力に求めたい。そしてわれわれは、地域間や広域の連携により、圏域全体で来訪客の滞留時間を最大化するような観光開発、「感動の地」づくりを進めよう。
- ③地域における人手不足は観光産業においても例外ではない。多様化する観光ニーズに応える「感動の地」として進展していくため、ITやAIの活用等による生産性向上などの経営革新にも積極的に取り組もう。
- ④「感動の地」は、安全・快適でなければならない。多発する自然災害など不測の事態に備え、訪れる人々が安心して過ごせるようにしたい。地域を挙げた防災対策はもちろんのこと、万一の際に来訪客に確実に情報が届く仕組みと救援方策を構築しよう。



▲団体専用臨時列車「なごみ」

専用臨時列車を運行。本大会では、大会参加者向けに5・6日の両日、JR会津若松駅・郡山駅間で、今回運行された列車は、E655系ハイグレード車両「なごみ(和)」。全席電動リクライニングシートで、ITモニター付の豪華車両。車内では、会津名物のわっぱ飯弁当を提供したほか、起き上がり小法師を配布。利用者はラグジュアリー感に包まれながら列車の旅を楽しみました。



▲笑顔のお出迎え(女性会)

「紅葉の橋」を披露して開宴。当所副会頭の竹田秀大会実行委員長が開会を告げ、洪川会頭が挨拶しました。三村会頭や内堀雅雄県知事が加わり、鏡開きを行い、歓談に入りました。鱈の山椒漬、馬肉のしぐれ煮、ヒメマス小袖寿司など会津を中心とした県内各地の食材による料理を提供したほか、全国新酒鑑評会において史上初の6年連続金賞受賞蔵数全国一に輝いた本県の地酒を振る舞い、カレイ焼きそば、田楽



▲大会の盛況を祝い鏡開き



▲県内の地場産品が並び多くの来場者で賑わう物産展会場

「皆さんの当たり前が、『有難い』になるように外からの目線で見ることが大事」と外部からの視点の重要性を強調しました。



▲大賞の京都・大津商工会議所へ表彰状を贈呈

演。感動を与える観光地とは何か、またその実現に向けて意見を交わしました。会議の結びに「会津若松アピール」を採択。地方都市の多くが「縮小経済」に直面する中、単なる観光地から脱皮し、多様な手段による感動地づくりに商工会議所が中核となってまい進していくことを確認しました。

会津の食や地酒、芸能でおもてなし

初日の5日夕からは、あいつ総合体育館に会場を移し、全体交流会が開かれました。各地の情報交換を目的とした交流の場となっただけでなく、会津の食や地酒をPRする機会となりました。

など地元ならではの屋台も設け、当市のグルメを堪能していただきました。また参加者には会津漆器の盃をプレゼントし、地元特産のPRにも努めました。アトラクションとして被災地支援に熱心に取り組むジャズ歌手ナオミ・グレイスさん、サクソ奏者の大森明さんによるジャズライブも催され、会場を大いに盛り上げました。

分科会・エクスカーションでテーマを深堀り

全国商工会議所観光振興大会2018 in会津若松

地方都市の観光創造に向け活発に議論

5分野のテーマで分科会を実施

「全国商工会議所観光振興大会2018 in会津若松」は2日目の11月6日、會津風雅堂等市内三会場で5分科会を開催し、広域連携やインバウンド、歴史資源活用等で意見を交わしました。またこの日から市内外を訪れるエクスカーション（視察研修）も行われ、産や仏教文化を伝える各地を訪ねました。

分科会は全体会議における基調講演、パネルディスカッションを受け、現在の観光が持つ課題や可能性について深く掘り下げることを目指して開催しました。「広域連携」「歴史資源」「災害と観光」「ICT」の5分野に分かれ、地方都市が解決、取り組むべき課題を掲げ、各界の識者や実践者が意見を交換しました。

分科会ごとの出演者や討議要旨は次のとおりです。



柔軟な思考と発想の転換で歴史資源の活用を

第3分科会



熱心にメモを取る参加者（第5分科会）

第1分科会 「広域連携が生む新しい観光の価値」

～競争から協働によって個の魅力を高める手法とは。各地会議所の先進事例等をもとに広域連携の在り方を考えます。

コーディネーター

中根 裕 氏 (株) JTB総合研究所 主席研究員

パネリスト

竹村 隆 氏 函館商工会議所常議員 観光・飲食・サービス部長
岡本 堅吾 氏 北九州商工会議所常議員 観光サービス部長
竹田 秀 氏 会津若松商工会議所副会頭

第2分科会 「地方都市のインバウンド、大都市のインバウンド」

～今後の観光振興のカギを握るインバウンド。経済基盤が弱い地方都市が目指すべき方向とは。大都市と補完し合う連携策も探ります。

コーディネーター

中村 好明 氏 (株) ジャパンインバウンドソリューションズ 代表取締役社長

パネリスト

阿部 憲子 氏 南三陸ホテル観光女将
伊藤 秀雄 氏 (有) 伊豆沼津農産代表取締役
大関 松男 氏 長野県・清風荘専務

第3分科会 「歴史資源を生かした観光地づくり」

～歴史ブームで注目される歴史資源。より良い観光資源にブラッシュアップするための手法を学びます。戊辰150周年を迎える会津だけに必聴です。

コーディネーター

赤坂 憲雄 氏 民俗学者、福島県立博物館館長

パネリスト

松平 保久 氏 会津松平家14代
柳澤 秀夫 氏 会津会会長
紺野美沙子 氏 俳優

第4分科会 「災害と観光 風評とその脱却」

～東日本大震災は本県の観光に大きな傷跡を残しました。特に風評との戦いは現在も続いています。これからの自然災害に備えて「福島県の今」をご覧ください。

コーディネーター

高松 正人 氏 (株) JTB総合研究所 上級研究理事 観光危機管理研究室長

パネリスト

関谷 直也 氏 東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター准教授
坂本 征夫 氏 常磐興産(株)顧問
横田 純子 氏 NPO法人素材広場理事長

第5分科会 「ICTが開く観光の未来」

～ビッグデータ、SNS、急激なICT技術の進展は、観光産業とも無縁ではありません。その最前線の取組と活用について考えます。

コーディネーター

中村彰二朗 氏 アクセンチュア(株)福島イノベーションセンター長

パネリスト

藤本 裕之 氏 (株) ジェイアール東日本企画執行役員 ソーシャルビジネス開発局長
中川 敬文 氏 UDS(株)代表取締役社長
新城猪之吉 氏 (一財) 会津若松観光ビューロー理事長

テーマ 「歴史資源を生かした観光地づくり」

第3分科会は「歴史資源を生かした観光地づくり」で、戊辰150年の会津若松ならではの分科会となりました。

紺野氏は「会津の『什の掟』をもっと多方面で活用し、印象づけることも必要」と述べ、さらには「地元の人々が嫌いだら観光地にならない。好きな場所をどんどんアピールすべき」と呼び掛けました。松平氏は長州(山口県)の参加者がいることに触れ、「歴史観を固持せず、大切な部分を失わない範囲で時代にフィットする発想転換が必要」と強調。柳澤氏も「固定観念を打ち破って、柔軟に考えることが歴史資源を生かす第一歩」と語り、柔らかな発想こそ古い価値や資源を生かすために必要と訴えました。

赤坂氏は「一つの歴史観の押し付けはやめないとならない」という認識を持ち始めているとし、「ミュージアム(博物館)として観光地としての会津若松をどう豊かにデザインしていくかのヒントをいただいた」と語りました。

風評への対応の工夫と更なる備えが大切

第4分科会には「災害と観光」をテーマに掲げ、東日本大震災と原発事故を経験した本県の姿から学んでいただくことを目的として企画しました。

坂本氏は「復旧段階で次の対応、長期休業でも解雇をしないこと」を挙げ、「人を救えるのは人しかいない」と同社の姿勢を説明しました。

横田氏は「農産物等の売り込みの中で今も続く風評について」と語り、「日本人が福島を語り、訪れても大丈夫とのメッセージを発信してほしい」と呼び掛けました。関谷氏は「大規模災害が頻

発する現状を踏まえつつ「同じ災害はない。タイミングをみた取組が必要だ」と語りました。

高松氏は「復興段階で次の災害に備えた強靱な地域づくりも大切」と更なる備えへの重要性も指摘しました。

中川氏は現在の観光がICTを活用した「事業」としては不十分と現状を報告。藤本氏は「JRとして同社の「SEM」の活用策等を提案しました。新城市は当時観光の課題として住民を巻き込んでいない点を指摘しました。中村氏が「ベースは教育。そしてICTでどう世界で表現するかがテーマ」と述べました。話題は財政へ及び、入湯税やふるさと納税についてもその有効活用について意見交換



▲風評の戦いが続く福島を紹介

個性あふれる連携を期待

第1分科会「広域連携が生む新しい観光の価値」

第1分科会には「連携」という切り口から各地商工会議所の取り組み内容や成功の秘訣を探りました。

竹村氏(函館)は津軽海峡を挟んだ、青森県との観光連携やビジネスマッチング支援について報告。岡本氏(北九州)は関門海峡で隣り合う山口県下関市との事業実施において「一体感」というのがひとつのコンセプト」と紹介されました。

竹田氏(会津若松)は戊辰戦争に代表される「ゆかりの地CIEネットワーク」事業の取組、そこから生まれた民間の連携へつながった事例も発表されました。

コーディネーターの中根氏は「この指とまれ方式で全国に発信し、新たな連携を構築してほしい」と個性あふれる連携と商工会議所への期待を語りました。

外国人のニーズ把握と地域の一体化が必要

第2分科会には「インバウンド(訪日外国人)対応」がテーマとなりました。

阿部氏は「被災で生まれた地域の連携をそのまま受け入れ体制づくりに活用している」と報告、逆境を逆手に取った取組を示しました。

伊藤氏は「農業人口が多い地域性を活かして、農業体験や農泊を中心とした現況を説明。行政と協議所、観光協会が受入れ体制を立ち上げています。

大関氏は「受入れは外国人が何を求めているかを考え、地域が一体になった体制が必要」と強調し、「地域の理念をお金に結び付けていくことが大事」と結び述べました。



▲個性ある受け入れ手法を発表

地域と旅行者の橋渡しに

第5分科会には「ICT(情報通信技術)と句の話題で開催。観光とICTの結びつきを軸に意見を交換しました。

中川氏は現在の観光がICTを活用した「事業」としては不十分と現状を報告。藤本氏は「JRとして同社の「SEM」の活用策等を提案しました。新城市は当時観光の課題として住民を巻き込んでいない点を指摘しました。中村氏が「ベースは教育。そしてICTでどう世界で表現するかがテーマ」と述べました。話題は財政へ及び、入湯税やふるさと納税についてもその有効活用について意見交換



▲ICTの有効活用を講じる出演者

歴史や先端産業など7つのコースでフィールドワーク



▲会津若松三観音 鳥追観音で説明を受ける参加者



▲米沢・上杉城史苑



▲七日町界隈を散策



▲中田観音を参拝する参加者

これまで当所がモニターツアー等で実施してきた産業観光や街道観光を踏まえ、物語やテーマ性を盛り込みました。それぞれのコースは【別表】のとおりです。

このうち会津の仏教文化に触れる「仏都会津を訪ねる」コースは、28年度に日本遺産に認定された「会津の三十三観音めぐり」を素材とし、立木観音や中田観音、鳥追観音の「こころり三観音」等を訪問。当地の生活に今も伝わる信仰の姿を感じていただきました。参加者からは「これほどの仏教文化が残されているとは驚きだ」等との感想の一方で、こうした地域資源が知られていないとの課題も指摘されました。

このコースは戊辰の節目を感じる「戊辰150年縁(えにし)ツアー」にシャッター通りが再生した「七日町通り大正浪漫観光ツアー」が人気を集めました。

戊辰コースでは鶴ヶ城を訪れ、天守閣での企画展を見学。激動の時代に巻き込まれた会津藩の姿を各種の展示から学び、「自分のルーツが福島なので感動した」との感想もありました。

七日町通りでは、あいにくの雨に見舞われた時間帯もありましたが、「初めて訪れたが、良い所です。春にまた来たい」との、リピーター宣言も頂戴しました。

コース名	概要
G 戊辰150年 縁(えにし) ツアー	時代のうねりに抵抗し、義を貫いた会津。歴史を体感するツアー。鶴ヶ城、松平家廟所、飯盛山等
H 商店街再生・まちなか観光ツアー	シャッター通りが大正浪漫の街並みに。七日町通り(絵ろうそく体験・末廣酒造・満田屋・福西本店等)
I 日本遺産「会津の三十三観音めぐり」	こころり三観音など会津の仏教文化を見て、聞いて、感じるツアー。中田観音、立木観音、鳥追観音
J 日本遺産「未来を拓いた一本の水路」	明治の大プロジェクト・安積疎水と開拓。産業観光コース。猪苗代第二発電所、十六橋、郡山市開成館等
K 会津ICT・先端産業見学ツアー	ICT分野で日本の先端を走る会津大学や企業集積を目指す施設を見学。ICTオフィス、会津大学等

コース名	概要
A 日本遺産を巡る	～東北地方で最も早く仏教文化が開花した会津を紹介～
B 仏都会津を訪ねる	徳一ら僧侶が活躍した仏都会津。名刹の数々を紹介。会津若松三観音・福満虚空蔵尊願寺・新宮野神社(長庚)等
C 会津五街道をめぐる	～会津藩祖・保科正之公開削の五街道。当所街道観光からご紹介～
D 下野街道(会津西街道)	会津から江戸への最短経路。街道の面影をたどり、戊辰の激戦地・白河へ。大内宿、白河関跡、小峰城、南湖公園等
E 米沢街道	伊達政宗や上杉景勝ら名だたる大名が通った道。裏磐梯の景色とともに。裏磐梯五色池、楢原歴史館、米沢市・上杉神社等
F 二本松街道	歴代藩主の参拝の道。藩祖祭祀の神社を経て、もう一つの戊辰悲劇の地へ。飯盛山、慧日寺、亀ヶ城・土津神社、鶴ヶ城(南人形)等